

井上定期会設立百一年
井上定期能 九月大阪公演
令和八年九月五日(土)
午後十二時四十五分開演
於・大槻能楽堂

解説 井上嘉介

一時

半 部

里女 寺澤拓海

僧 福王知登

大鼓 森山泰幸
小鼓 久田舜一郎
笛 齊藤敦

後見 橋本光史
井上嘉介

吉田和史 立花香寿子
橋本充基 吉浪壽晃
今村哲朗 井上裕之真
水田雄晤 吉田篤史

魚説経

出家 善竹彌五郎

施主 上西良介
後見 上吉川徹

休憩十五分

仕舞

三時頃

淡松夕班融

路 虫 顔 女

吉田和史 吉浪壽晃
井上嘉介 井上裕之真
橋本光史

橋本充基 水田雄晤
吉田篤史 齊藤信輔

阿 漕

阿漁翁 寺澤幸祐

男 岡 充

大鼓 守家由訓
小鼓 久田陽春子
太鼓 中田一葉
笛 赤井要佑

浦人 小西玲央

後見 寺澤拓海
井上裕之真

吉田和史 立花香寿子
橋本充基 吉浪壽晃
今村哲朗 浦部幸裕
齊藤信輔 橋本光史

附祝言

終了四時半過ぎ

主催 井上定期会

【能】 半 部 はじとみ

都、紫野雲林院の僧が、夏の修行も終わり近くなったので、その期間中に供えた花々の供養を行う。するとどこからともなく一人の女が現れて花を捧げる。僧が名をたずねると、ただ夕顔の花とだけ答へ、名を明かさなない。僧が更に問うと、五条あたりの者とだけ告げ、花の陰に消え失せる。不思議に思った僧が五条あたりへ弔いに行くと、荒れ果てた一軒家に夕顔の花が咲いており、半部を押上げて一人の女性が現れる。女は、光源氏と夕顔の花の縁を物語って舞を舞い、夜明けを告げる鐘と共に僧に別れを告げ、半部の中へと消えてゆく。後場、半部屋の作り物を常座(演出によっては一ノ松)に出す。後シテは半部戸を押上げて姿を現わし、最後にふたたび作り物へ入って留める。本曲は、主役が夕顔の花の精が、いずれとも判然としないところに特色を持つ。夕方に白い花を咲かせる夕顔、そのほのかなさは描きつつ、『源氏物語』夕顔の巻を巧みに取り入れて、恋の喜びを描いた愛くるしい作品である。

【能】 阿 漕 あこぎ

九州日向国(宮崎県)の男が伊勢国(三重県)安濃の郡へ来る。そこへ一人の年老いた漁師が釣竿を肩に現れる。男が尋ねると、老人は、ここが阿漕が浦であると教える。男がこの浦を詠んだ古歌「伊勢の海、阿漕が浦に引く網も、度重なれば願れにけり」を口ずさむと、漁師も「逢ふ事も、阿漕が浦に引く網も、度重なれば願れやせん」と別の古歌を詠じる。つづいて男が「阿漕が浦」の名の謂れを尋ねると、老人は、昔からこの浦は伊勢大神宮の御膳を調える為の網を入れるところであるので、一般には禁漁とされていたが、阿漕という漁師が度々密漁をし、捕えられてこの沖に沈められたことから、ここを阿漕が浦というようになったと語る。やがて夕暮れ方、老人は竿を使ううち、波間に消え失せる。

旅人が法華経を誦誦して回向をすると、阿漕の亡霊が四手網を持って現れ、密漁の有様と地獄での苦しみを見せ、救いを求めてまた浪間に消えてゆく。

後場で四手網を用いて演じる立回りの場面が特徴を持つ。すなわち網を仕掛け、魚を追ひ込み、長い紐をたぐり寄せて網を引き上げる様を示し、漁をする物真似として他に類を見ない。また、旅の男を僧とすることもあ

次回 令和八年十月十七日(土)

午後十二時四十五分開演

於 京都観世会館

能 三 輪

橋本擴三郎

能 菊慈童

吉田 潔司

遊舞之衆

《観能券》

《取り扱い》

五枚綴券 17500円
前売券 3800円
当日券 4500円
学生券 2000円

各出演者
京都観世会館

お客様へのお断り

○都合により出演者に変更がある場合がございます。
あらかじめご了承ください。

○全館自由席です。

○お客様の都合による払い戻しはできません。

○上演中のお出入りはなるべく遠慮ください。
○場内での私語・飲食・撮影・録音は遠慮ください。
○場内では携帯電話の呼び出し音をお切りください。

大槻能楽堂

〒540-0005 大阪市中央区上町 A-7
Tel.06-6761-8055

